第１章

新 市 の 姿

第１章　新市の姿

１　新市の概要

新「久喜市」は、関東平野のほぼ中央、埼玉県東北部に位置し、都心まで 50km 圏にあり、東は幸手市及び茨城県五霞町、南は蓮田市、白岡町、宮代町及び杉戸町、西は鴻巣市及び桶川市、北は加須市及び茨城県古河市に隣接する、東西に約 15km、南北に約 13km、面積 82.4km^2 の都市である。

地勢は、台地や自然堤防などの微高地と後背湿地などの低地からなるほぼ平坦地であり、利根川、中川、青毛堀川、備前堀川、野通川及び元荒川などが流れている。

内陸性の太平洋側気候に属し、夏は高温多湿、冬は低温乾燥で、平成 22 年の年間平均気温は約 15℃、降水量は約 1,300mm である。

南北方向に久喜インターチェンジを擁す東北縦貫自動車道（以下「東北道」という。）、国道 4 号及び国道 122 号が縦断し、東西方向に建設中の白岡菖蒲インターチェンジを擁す首都圏中央連絡自動車道（以下「圏央道」という。）及び国道 125 号が横断しており、東北道と圏央道を結ぶ久喜白岡ジャンクションの建設も進められている。

また、鉄道については、南北方向にＪＲ宇都宮線の他、東京メトロ半蔵門線が乗り入れている東武伊勢崎線及び東武日光線が縦断しており、市域内に 3 路線あわせて 7 つの駅を擁している。

今後、豊かな自然環境と調和を図りながら、交通の利便性を生かした更なる発展が期待されている。

◆人口、世帯数及び面積

	総人口	総世帯数	面積
新市	157,108 人	60,049 世帯	82.40 km^2
旧久喜市	71,568 人	28,231 世帯	25.35 km^2
旧菖蒲町	20,930 人	7,486 世帯	27.37 km^2
旧栗橋町	27,572 人	10,024 世帯	15.78 km^2
旧鷲宮町	37,038 人	14,308 世帯	13.90 km^2

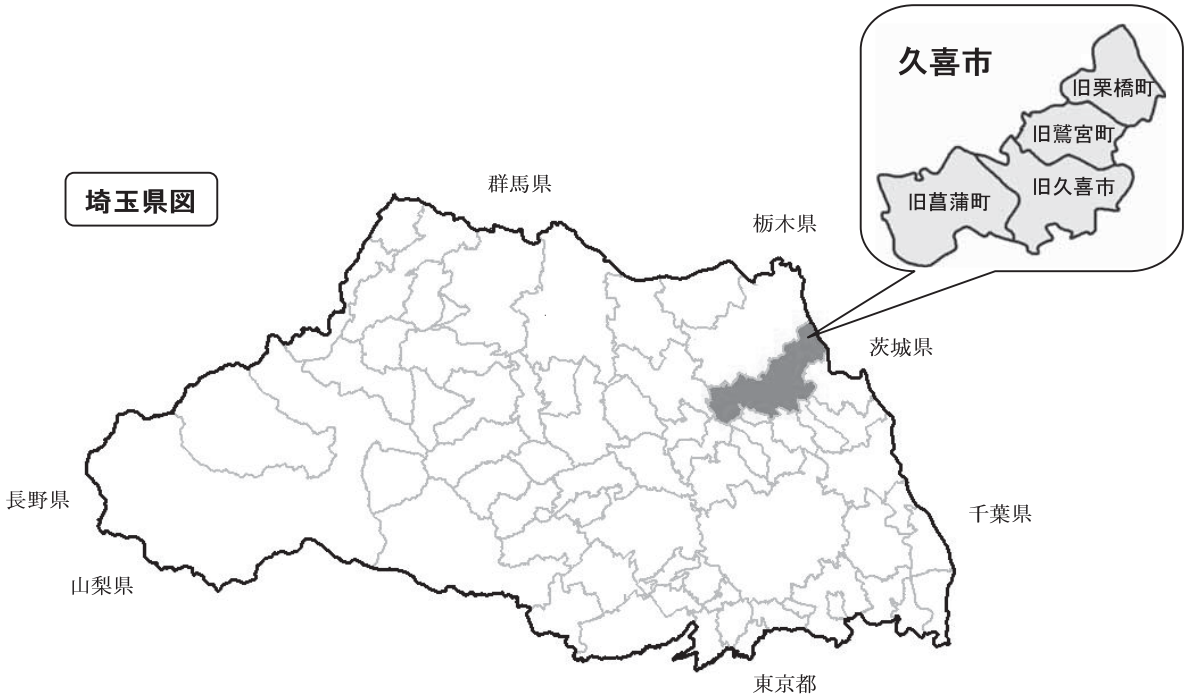
※平成 22 年 3 月 1 日現在

◆産業別就業者人口

	第 1 次産業	第 2 次産業	第 3 次産業
新市	2,759 人	21,067 人	51,691 人
旧久喜市	704 人	9,390 人	24,725 人
旧菖蒲町	1,370 人	3,677 人	6,626 人
旧栗橋町	298 人	3,600 人	8,744 人
旧鷲宮町	387 人	4,400 人	11,596 人

※平成 17 年国勢調査

◆新市位置図



２　１市３町の沿革

(1) 久喜市の沿革

江戸時代後期、久喜の町場には毎月３と８のつく日に「市」が開かれ、近在の商品作物が集まり、江戸市場への商品の集荷地として発展した。江戸時代中期以降から白木綿を中心とする綿織物業地帯として知られていたが、その後は養蚕業に代わり、さらに大正時代には梨の栽培が広まった。

昭和 29 年７月１日には、久喜町、太田村、江面村及び清久村が合併して、人口 21,982 人の新たな久喜町が誕生し、その後、昭和 46 年 10 月１日に市制が施行された。

市内には、ＪＲ宇都宮線と東武伊勢崎線の交差駅のほか、東北道の久喜インターチェンジがあることから、交通の要衝としての好条件がそろい、久喜菖蒲工業団地の造成や団地開発等が進められた。また、近年、東北道と圏央道を結ぶ久喜白岡ジャンクションの建設も進むなど、県東北部の拠点都市として発展を続けている。

(2) 菖蒲町の沿革

江戸時代中期、見沼代用水路の開発が行われ、見沼通船が開始された。菖蒲町（戸ヶ崎村）には河岸が置かれるようになり、毎月２と７のつく日に「市」が開かれ、物資の集散地として地域経済の拠点となった。

また、菖蒲地域は、江戸時代の新田開発を始め、現在に至るまで、平坦な地形と豊かな自然を生かした農業を産業の中心として発展してきた。

昭和 29 年９月１日には、菖蒲町、小林村、三箇村、栢間村及び大山村大字上大崎が合併し、人口 17,034 人の新たな菖蒲町が誕生した。

その後、久喜菖蒲工業団地が完成し、多くの企業が進出したほか、近年では大型商業施設の開業や圏央道の白岡菖蒲インターチェンジの建設工事が進められており、産業都市としての発展が見込まれている。

(3) 栗橋町の沿革

江戸時代の初め、幕府は利根川の流路の安定や水運の開発などを目的として、大規模な流路の付け替え工事を行った。寛永元年（1624 年）頃には、江戸北方の警護のため栗橋関所が設置され、日光道中の栗橋宿は、関所と利根川の渡船場を備えた宿場町として栄えた。

農村地帯であったこの地域にも、産業の近代化の波が押し寄せ、明治 21 年紡績工場が操業を開始し、工業の発展の兆しもみせていた。

昭和 32 年４月１日には、栗橋町、静村及び豊田村が合併して、人口 12,609 人の新たな栗橋町が誕生した。

町内には、国道４号と国道 125 号のほか、ＪＲ宇都宮線と東武日光線の交差駅があるなど、交通の利便性に恵まれた地域として発展している。

(4) 鷲宮町の沿革

鷲宮は、鷲宮神社の門前町として発展してきた。江戸時代には毎月 5 と 10 のつく日に「市」が開かれ、穀物や木綿などを売る多くの商人や村人で賑わっていた。

明治 35 年に東武鉄道鷲宮駅が開設すると、鷲宮の良質な土壌が注目され、鷲宮で瓦製造が始められ、その後、瓦製造はますます盛んとなった。

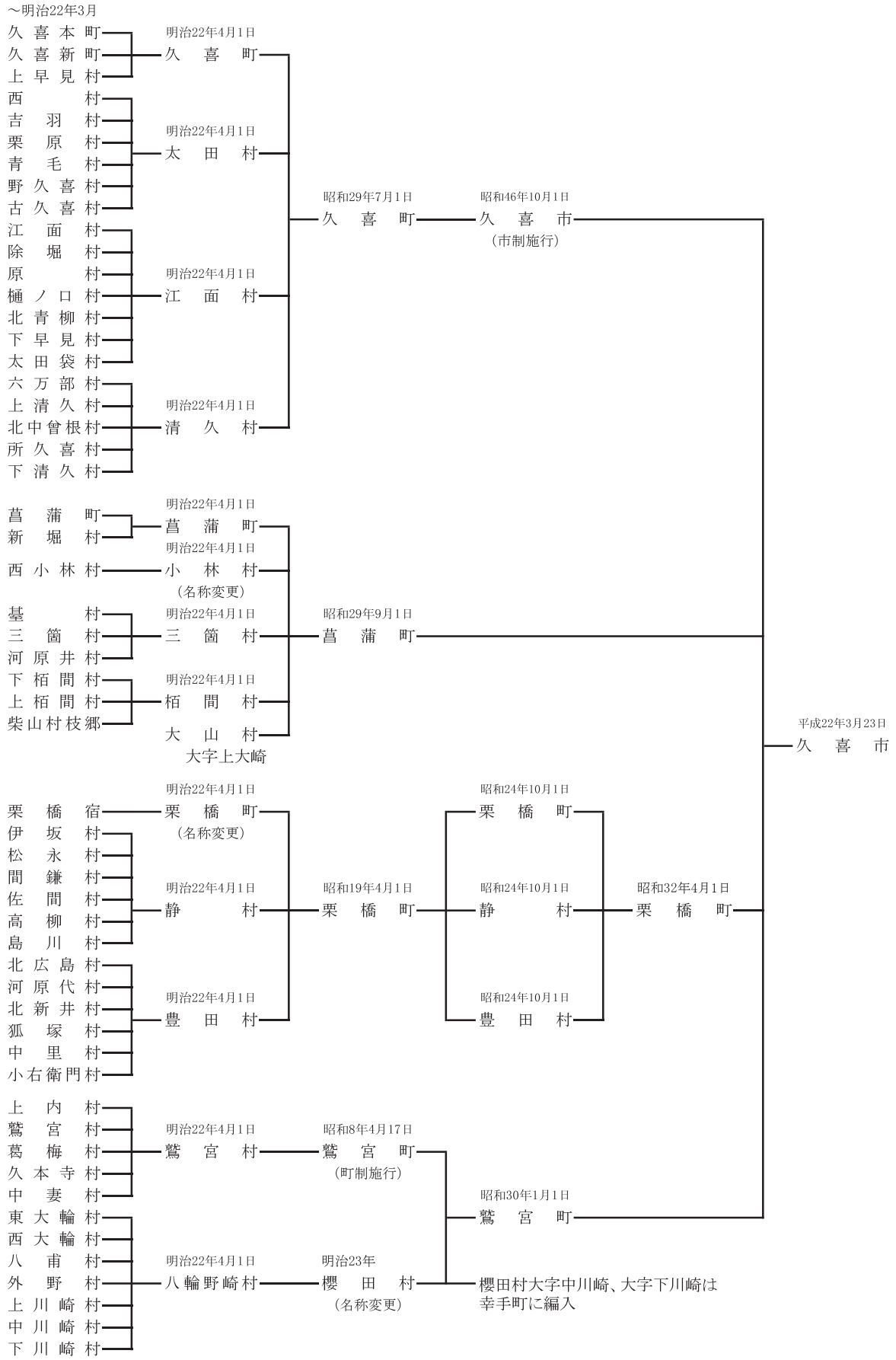
昭和 30 年 1 月 1 日には、鷲宮町と櫻田村（大字中川崎・大字下川崎除く）が合併し、人口 8,836 人の新たな鷲宮町が誕生した。

昭和 40 年代後半には、わし宮団地の入居により人口が急増し、その後、鷲宮産業団地の開発や東北本線（ＪＲ宇都宮線）東鷲宮駅が開業するなど町の様相は一変した。近年では、東鷲宮駅周辺の区画整理事業により住宅開発が進み、人口増加率が県内上位の町として発展している。

◆新市の発展の一翼を担う久喜白岡ジャンクション

久喜白岡ジャンクション完成予想図

3　合併の変遷


～明治22年3月
久喜本町
久喜新町
上早見村
明治22年4月1日
久喜町
西村
吉羽村
栗原村
青毛村
野久喜村
古久喜村
明治22年4月1日
太田村
昭和29年7月1日
久喜町
昭和46年10月1日
久喜市
（市制施行）
江面村
除堀村
原村
樋ノ口村
北青柳村
下早見村
太田袋村
明治22年4月1日
江面村
六万部村
上清久村
北中曾根村
所久喜村
下清久村
明治22年4月1日
清久村
菖蒲町
新堀村
明治22年4月1日
菖蒲町
西小林村
明治22年4月1日
小林村
（名称変更）
昭和29年9月1日
菖蒲町
墓村
三箇村
河原井村
明治22年4月1日
三箇村
下栢間村
上栢間村
柴山村枝郷
明治22年4月1日
栢間村
大山村
大字上大崎
平成22年3月23日
久喜市
栗橋宿
明治22年4月1日
栗橋町
（名称変更）
昭和24年10月1日
栗橋町
伊坂村
松永村
間鎌村
佐間村
高柳村
島川村
明治22年4月1日
静村
昭和19年4月1日
栗橋町
昭和24年10月1日
静村
昭和32年4月1日
栗橋町
北広島村
河原代村
北新井村
狐塚村
中里村
小右衛門村
明治22年4月1日
豊田村
昭和24年10月1日
豊田村
上内村
鷲宮村
葛梅村
久本寺村
中妻村
明治22年4月1日
鷲宮村
昭和8年4月17日
鷲宮町
（町制施行）
昭和30年1月1日
鷲宮町
東大輪村
西大輪村
八甫村
外野村
上川崎村
中川崎村
下川崎村
明治22年4月1日
八輪野崎村
明治23年
櫻田村
（名称変更）
櫻田村大字中川崎、大字下川崎は
幸手町に編入